

本報告論文集について

本冊子は、2013 年 8 月 12 日に京都大学大学院文学研究科で行われた、「2013 年度京都大学 南京大学社会学人類学若手ワークショップ〜＜京都エラスムス計画＞から生まれたもの〜」の報告論文集である。

2010 年の夏に京都エラスムス計画により、櫻田涼子、平井芽阿里、松谷実のり、中山大将、福谷彬ら 6 名が南京大学へ派遣され、2 ヶ月間当地で中国語の学習と、巫靚（当時：南京大学外国語学部所属）を含む南京大学社会学院の院生との共同調査を行った。その成果は、『京都エラスムス計画 2010 年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告―南京市・江蘇省南部の都市と農村―』（2011 年）にまとめられている。2011 年の夏には再度京都エラスムス計画により、中山大将、櫻田涼子 2 名が南京大学へ派遣され、一ヶ月間の中国語学習と南京大学社会学院院生との共同調査を行ったほか、『京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム』を行った。京都大学からは中山、櫻田、両名が報告を行い、南京大学からは王華ら 3 名が報告を行い交流を行った。巫はこの際に通訳を担当した。この成果は、『京都エラスムス計画 2011 年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告―京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集―』（2011 年）にまとめられている。2012 年は京都エラスムス計画による派遣はなかったものの、中山大将、櫻田涼子、平井芽阿里、福谷彬が計画を立て、2010 年以来協力を得ている張玉林教授と提携し、再度ワークショップの開催を実現した。この成果も、『2012 年度京都大学・南京大学社会学人類学若手研究者共同ワークショップ報告論文集』にまとめられている。

このように京都エラスムス計画から生まれた京大と南京大学の若手研究者交流は 4 年目を迎え、今回は京都大学アジア研究教育ユニットの支援を得て、南京大学の院生を招いての初の京大でのワークショップ開催となった。本ワークショップの特色の一つは、基本的に日本語と中国語という双方にとっての母語を使用言語としていることである。しかし、南京大側の参加者は誰ひとり日本語を解さないし、京大側の参加者の多くも中国語を解さない。このため、報告原稿の翻訳作業や当日の通訳などに膨大な時間と労力を割いた。とりわけ、通訳を務めてくれた中国人留学生院生には大きな負担をかけた。しかし、その甲斐もあって本報告書には日中両語訳の報告論文を収めることができた。さらに、報告論文集のために当日のコメントを反映して書き直してくれた参加者もあり、改めて報告書を刊行する意義が深まりうれしい限りである。

中国研究者、日本研究者だけでなく、東南アジア研究者、東欧研究者まで巻き込みながら、アジア言語での国際学術交流が図られている場はなかなかないであろう。英語中心のアジア国際学術交流の場は近年多いが、本ワークショップでは、自分の母語で考え、アジアの言語で分かち合うことを目指した。もちろん、本報告書を見ればわかるように英語報告も含まれており、決して英語を排斥しようというわけではない。重要なことは、国際学術交流における「多様性」である。東アジア交流数千年の歴史を思い返し、その上にこのワークショップを接ぎ足したいのである。

京都エラスムス計画の南京派遣で参加者が感じた、分野やフィールド、そして国籍を越えた交流は、同計画が幕を閉じて、いまだなお熱をもち続けている。ぜひ、本報告書に目を通し、「京都エラスムス計画から生まれたもの」の一端を知っていただきたい。

福谷彬 中山大将 巫靚
2013 年 12 月 1 日

关于报告书

本报告书为 2013 年 8 月 12 日于京都大学文学研究科举行的“2013 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛～由‘京都伊拉斯谟计划’应运而生的学术交流～”活动的报告论文集。

2010 年夏中山大将、樱田凉子、平井芽阿里、福谷彬等六名日本年轻学者通过“京都伊拉斯谟计划”被派往南京大学进行汉语进修，并与李德营、巫靓（当时南京大学外国语学院硕士研究生）等南京大学的学生进行了共同调查。其成果为《京都伊拉斯谟计划 2010 年度中国社会研究短期集中项目报告书：江苏省南京的城乡》（2011 年）。

2011 年夏中山大将、樱田凉子再次通过“京都伊拉斯谟计划”被派往南京大学。这一年除了进修汉语、共同调查外，还在南京大学举行了“南京大学京都大学社会学人类学博士论坛”。京大的中山、樱田以及南大的王华等三名博士研究生进行了报告，并将成果编纂为《京都伊拉斯谟计划 2011 年度中国社会研究短期集中项目报告书：南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛》（2011 年）。

2012 年虽没有人被派往南京大学，但有志者与一直协助“京都伊拉斯谟南京派遣计划”的张玉林教授进行协商，再度实现了学术交流的机会，并将成果编纂为《2012 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛报告论文集》。

就这样，由“京都伊拉斯谟计划”所应运而生的京都大学与南京大学青年学者的学术交流迎来了第 4 个年头。今年在京都大学亚洲研究教育机构（KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT）的资金资助下，我们得以邀请到南京大学的硕士及博士研究生到京都大学来进行交流。作为本论坛的特色之一，我们允许参加论坛的诸位报告者使用自己的母语进行发言，但由于南京大学的诸位参加者不懂日语，而京都大学的参加者也大多不会中文，因此在对发言稿进行事前翻译以及论坛当天的现场翻译部分我们花费了很大精力。这其中，特别要感谢当天为我们进行现场翻译的京都大学的中国留学生们。但正因此，我们有幸能将所有报告的中日两种语言的版本都收录其中。并且参与本次论坛的发言者中，有的同学在论坛之后结合现场的提问，对发言稿进行了重新修改，为此我们更深感论文集发行的价值所在。

今年的论坛不仅汇聚了中国和日本研究的年轻学者，在报告的点评部分，我们还有幸邀请到东南亚、东欧研究者的参与。近年以英语为主要使用语言的亚洲国际学术交流活动较多，然而本论坛的主旨则是通过自己的母语思考，利用亚洲的语言进行相互理解。这在目前的亚洲国际学术交流活动中堪称少数。当然，在这里我们并不是排斥英语的使用，报告书中也有用英语书写的论文，但重要的是我们希望通过我们的论坛实现国际学术交流的“多样性”，以此继承东亚数千年交流的历史。

虽然“京都伊拉斯谟南京派遣计划”已经结束，但通过参与这一活动，年轻学者们所感受到的，超越自己学术领域、调查地以及国界的交流却依旧被进行着。我们也希望大家能够通过阅读本报告书，对“由‘京都伊拉斯谟计划’应运而生的学术交流”有一定了解。

福谷彬 中山大将 巫靓
2013 年 12 月 1 日